

地域の酪農リーダーを目指して

熊本県立菊池農業高等学校 畜産科学科 3年 益崎 裕朗

10月の北海道。静かに雪も降り始め、緊張感が張りつめている。ここは、全日本ホルスタイン共進会の審査会場。全国の地区予選を勝ち抜いた名牛が誇らしげにリードマンと歩いています。愛牛ユキ号を仲間と2週間現地で管理し、最高のボディーコンディションに仕上げた挑んだ12部の審査。リードマンだった私は審査員の一举手一投足に集中していました。1等賞5席。「やった!」序列が決定した時、私の体は喜びに震えていました。会場を出るとあたり一面真っ白の銀世界。感動にはてった私とユキ号を優しく包みこみ、祝福しているようでした。酪農家の4代目に生まれ、幼い時から父のような牛飼いになることを目標にしてきた私は、高校進学にあたって父の母校である菊池農業高校に進学しました。私が小学2年生の時、栃木全共に出場した父への憧れから、入学すると牛部へ入部し、乳牛改良について勉強を進めてきました。最近、全共に出場したことで全国各地に仲間が広がり、ますます酪農の魅力に惹かれています。

さて、私の住む菊池市は全国有数の水田地帯で、約3,800ヘクタールの水田では日本穀物検定協会食味ランキングにおいて8年連続で最高位を受賞した七城米や飼料用イネ、水田ゴボウなどが作付けされています。しかし、我が家の牧場の周辺では農家の後継者不足から耕作放棄地が目立ち、全国的に見ても農家の高齢化と小規模農家の離農が増えてきました。酪農家の現状は、平成元年から平成26年の間に66,700戸あった酪農家戸数が18,600戸に、飼養頭数は75万頭減少、生乳生産量も低下しています。昨年は牛乳生産が追いつかずバター不足が発生し、約420万トンの乳製品を輸入に頼りました。このような中、我が家では、酪農部門で経産牛70頭、育成牛40頭、肉牛部門で黒牛の肥育20頭、繁殖牛20頭、総頭数150頭を飼養する乳肉複合経営を家族で営んでいます。長年の努力で2013年らくのうマザーズ枝肉共励会ではグランドチャンピオンを受賞しました。また、低コスト高品質の自給飼料生産を目的とした隈菊飼料生産組合を地元で15年前に発足しています。4軒の酪農家が共同で収穫機を導入し収穫面積100ヘクタール以上の牧草収穫を行っています。現在は年間粗収入1億円を上げています。

幼い時から牧場で手伝いをし、父の背中を見て育ってきた私が考える現在の経営における問題点は、家族労働中心で150頭の牛の管理と広い圃場での作業をこなしているため労働力にゆとりがないことです。普段は両親を中心に家族3人と海外からの研修生2人が作業を行っています。夕方は私と妹も搾乳等の手伝いに入っていますが、1日の作業が終わるのは夜の9時を過ぎます。農繁期は、父と私が耕耘や牧草収穫を夜中まで行います。早朝から夜遅くまでの作業は家族にとって大きな負担になっています。また、家族経営のため

休暇が殆ど取ることができないことも大きな課題です。

そこで、現在の我が家の経営の課題を改善し、私の理想とする牧場を創り上げるために、卒業後は次の4点にチャレンジしようと考えています。

第1に現状を打破するため、隈菊飼料生産組合をさらに発展させ、農家の飼料作物栽培にかかる経費や時間を代行するコントラクター組合にします。組合側がコントラクターを雇い収穫作業等を外部委託することで農家の負担軽減を図ります。コントラクターを雇うことで地域に新たな雇用を生み出すこともできます。

第2に、酪農家の生産力をアップさせるための菊池イノベーションとして移動型発酵TMRセンターを提案します。発酵TMRの1つ目の利点はTMRを高品質のまま長期貯蔵できる点です。細断型ロールベアラでベール成型しラッピングすることでTMRの品質が保たれ、牛に質の良いTMRを食べさせることができます。2つ目の利点は製造場所を移動できる点です。細断型ロールベアラとミキサーをトラクターで牽引することで製造場所を移動できます。そのため、複数の牧場でTMRを製造できます。将来は大型のミキサーと細断型ロールベアラを共同で導入する予定です。機械の余力も出てくると考えられるため、受託で周辺の酪農家のTMR製造を行います。従来のTMRセンターと違い、各農家の牛群レベルに応じた分量調整も可能なため酪農家の生産力を最大限アップできます。この移動型発酵TMRセンターはそれぞれの農家が必要とするTMRを製造でき、周辺の酪農業を発展させる可能性を秘めています。

第3に家族労働力の問題です。将来は、現在の経営を株式会社化し、年間雇用を受け入れ労働力を確保します。酪農家が休暇を確保できない問題も解決することができます。さらに、現在の海外からの研修も受け入れを継続すると同時に、新規就農を含めた若い後継者の研修の場を提供し仲間づくりを進めていきます。

第4に消費者との交流を広げ、牛乳の消費拡大のために教育ファーム活動を取り入れた6次産業化を目指します。高校で食品加工の勉強をしている妹と協力して、我が家の牛乳を使ったヨーグルトやソフトクリーム等の販売を通して牛乳の魅力をアピールしていきます。

3年生になり、新学期がスタートしてすぐの4月16日、熊本地震が発生しました。暗闇の中、私達を「ガタガタ」という恐ろしい音と強い揺れが襲いました。熊本は甚大な被害を受け、我が家の牧場も停電により搾乳はできませんでした。菊池では地下水脈が震災の影響を受け、水道からは茶色の濁った水が出てきました。濁った水で作ったミルクはまるでカフェオレのような色をしており、何頭もの子牛が下痢をしたり、哺乳ロボットも調子が悪くなりました。長引いていた余震の影響からか乳量も20%ほど低下しました。知り合いの牧場には全半壊したところがあり離農せざるをえなくなり、牛を手放す人もいました。少しでも支援ができればと我が家でも7頭の牛を引き取りましたが、牛と別れる時、その方の目からは涙が溢れていて

とても心が痛くなりました。

しかし、私たちが立ち止まっていたら復興を進めることはできません。大変な状況だからこそ酪農家の結束を深め、前に進んでいく必要があります。震災で人間も被災しましたが、牛も同じ被災者です。牛の体調は人間が管理するしかありません。そこで、現在、我が家を含めた数軒の酪農家で行っている酪農コンサルタントの方を交えたバーンミーティングを発展させ、酪農家がお互いを高め合うことのできる環境を地域の仲間とともにこれから作っていきます。様々な酪農における課題を仲間と議論し、答えを導き出すことが酪農業の発展、地域の復興に繋がると思います。

私は、これらの大きな目標を達成するために卒業後は大学へ進学し、さらに酪農に関する専門的な知識や技術を学びたいと思います。地域酪農業を引っ張る牛飼いという夢を実現するまで、私は挑戦を続けます。
